

舟を編む

BN コレクションより 8「かごで水を汲む」に始まって、芋づる式に BN 所有のかごの紹介を続けてきた。そろそろ一旦終わりたいところだ。

水に関連しそうな収蔵物の写真を抜き出しておいたのだが、これがまだ残っていた。ペルーの、チチカカ湖のトトラ舟の模型。旅行した時のお土産品だ。このようにカヤツリグサ科などの茎をしっかりと束ねた舟は、エジプトやアメリカにもあり、オーストラリアのアボリジニの写真にも似たものが写っているのを見つけた。しかし、普通目にするものではないだろう。もし、最近どこかで見たような気がしたのなら、3 万年前にどうやって大陸から日本にヒトが渡ってきたかを探ろうとする実験考古学の映像かもしれない。最初の航海実験の舟は、与那国島の草を束ねたものだった。(残念ながら、草舟では目的を達せなかったようで、その後、竹いかだ、丸木舟、と挑戦し続け、最後には見事に成功している。)

舟という水の上を移動する手段の始まりは、「浮き」だという。たしかに、水の上に浮くモノ、木片、革袋、ひょうたんなどにつかまれば、泳いで渡るよりは、ずっと可能性が広がる。そういえば、アボリジニとともに写っていたのは、枝や草を束ねるという原初の形から少し舟に近づく途中、みたいな素朴なものだった。それに比べ、チチカカ湖のものは、巨大なカヤツリグサ科のトトラの茎を見事なまでにしっかりと束ね、それをさらに一体化させて作られている。チチカカ湖の浮島は足元も家も舟もすべてトトラでできている。実は南米旅行の折に、寄ったことがあって、この舟にも乗せてもらった。音も振動もなく水面を進む。スペイン語など皆目わからない私だが、トランキーロ(静か、穏やか)という言葉が突然実感として体に入ってきた瞬間だった。

この舟は、編むというより括っている感じが、いかにも編みましたといった舟も珍しくはない。できるだけきっちり編んだうえで、防水性のものを編み目に塗り込む。釣瓶かごととは逆に水は外側にあるわけで、しっかり目止めしないと命にかかわる。



他にも舟らしきもののコレクションはないかと思ったが、どう探してもなかった。さすがに本物は収蔵できないしなあ、ちょっと尻切れトンボだが、ここで終了しようかなと思いかけて、。

もうだいぶ前になるが、立ち寄った書店で平積みになっていた本が目についた。『舟を編む』。レコードにジャケ買いというのがあると聞いて、なんで中身もわからずに買うんだ?といぶかっていた私なのに、衝動的にタイトル買いした。少し経ってから三浦しおんのこの小説は、結構売れて話題になったが、このときは純粋にタイトル買い。もちろん、カバーの説明で、この「舟」は国語の辞典のことでその編集人たちが主人公だから、かごが出てこないのはわかってはいたけれど。

そうだ、編むには編集の意味もあった。記事ならあったはずだぞ、とバスケットリーニュースの総目次を検索する。ありました。古事記に出てくる竹を編んだ舟の話や、ベトナムのおわん型の小舟の写真が。

15号「かごの民俗 畠山豊」+コラム

77号「ベトナムのかご舟 上林貞直・喜美子」

映像にまで話を広げれば、トトラ舟については、国立民族学博物館の映像ライブラリーにすばらしい制作記録があって、バスケットリーをはじめたところに見て感激した。EC フィルム(エンサイクロペディアシネマトグラフィカ)にも、舟を編んでいる映像が数多く残されている。たしか、ヤシの葉のかごが舟に変貌する驚きの映像(E0832)があったはず。あれ、もう一度見たい!!